

# 関西の山あるき

---



深呼吸クラブ 編

京都東山の展望スポット	1
清水山と將軍塚	1
花と水の景勝を満喫	2
吉野宮滝	2
高原を埋める紅の絨毯	3
大和葛城山	3
伝説の森と社	4
鞍馬と貴船	4
六甲ハイクのマインストリート	5
六甲魚屋道	5
京都のフチお遍路	6
御室八十八箇所	6
西国三十三箇所 <small>の難路</small>	7
醍醐山	7
「水の山」六甲へ	8
六甲住吉道	8
鎮座する湖東の雄	9
伊吹山	9
仏教の聖地 天涯の要塞	10
比叡山	10
森と水のウォーキング	11
トゥエンティクロス	11
北山杉の里に秘瀑を訪ねる	12
菩提の滝	12

古代史の謎 情念の山	13
二上山	13
錦繡の季節 三尾の奥山へ	14
朝日峰	14
西播磨の麗峰	15
明神山	15
火鎮の神 月詣りの山	16
愛宕山	16
近代アルビニズム胎動の地	17
荒地山とロックガーデン	17
都の顔 大の字探訪	18
大文字山	18
グライダー飛翔の丘	19
高御位山	19
寂光院と大原の里山	20
金比羅山	20
稲荷信仰の深奥部	21
伏見のお山めぐり	21
白き精霊との邂逅	22
鞍馬と貴船	22
生駒の魅力再発見	23
生駒山	23
早春の霊場探訪	24
ポンポン山	24

京都東山の展望スポット

# 清水山と 將軍塚

約 3 時間

京都随一の名刹・清水寺から背後の清水山へのコース。東山三十六峰にも名を連ねる清水山、清水の舞台よりも広大な眺めが楽しめる青蓮院大日堂の將軍塚を経て、円山公園に下りると、観光地散策とは、ひと味違う東山散策が楽しめる。

清水寺は知っていても、清水山きよみずやまといわれて、即座に合点のいく人は少ないようだ。確かに、清水寺と比べると役者が違いすぎる。山それ自体を取り上げてみても、遠目から見ても顕著な山容が目立っているのならばともかく、のべつとした東山の山並みに埋没しているようでは、認知度が低くなっても致し方ない。

しかし、脇役であることを前提にすると、主役である清水寺のいい引き立て役を演じている。というのも、清水寺参詣のコースが、あまりにも定番化しすぎているからだ。清水寺をゴールにして、二年坂、三年坂を歩いたあとは舞台からの眺望を楽しみ、そして素直に清水坂ないし八坂通りを経て東大路へと下りていく。そんなお決まりプランにアクセントを付けるとすれば、清水寺をスタートにすえて、そこから



桜の季節の本堂舞台。定番には定番になる理由がある。

歩き回るといっても一興になると思われるからである。

他の人がやらないことをやって悦に入っている天邪鬼あまのじやく的な自己満足ではないかと言われると、そうなのかも知れない。しかし、東山山頂公園や將軍塚（青蓮院大日堂）からの眺望は、清水の



東山山頂公園の展望台から市街地を見おろす。京都駅周辺や西本願寺などは建物の配置もよく見てとれる。

舞台から眺めるものとは、異なった趣が楽しめるし、清水山の山頂を踏んだことから、「東山三十六峰」と称される山々の全部を踏んでみようという方向へ興味がひろがって行くこともある。脇役でありながら、いろいろと可能性をもっている山でもある。

花と水の景勝を満喫

# 吉野宮滝

約 7 時間

吉野山を語る形容としては、「花の吉野」が一般的だが、宮滝に離宮が営まれた飛鳥時代には、もっぱら「水の吉野」だった。そのシンボル「夢のわた」から上千本にいたるハイキングコースを歩き、水と花の両方を堪能する。

吉野を語るのに、「桜」は不可欠の要素である。しかし、それがわかっていながらも、やはり「水の吉野」には惹かれてしまう。吉野川を渡る柴橋からの奇景（夢のわた）や、象きさきの小川がつくるせせらぎ（桜木神社付近）など、宮滝における水景色には、千本桜に負けない魅力がある。

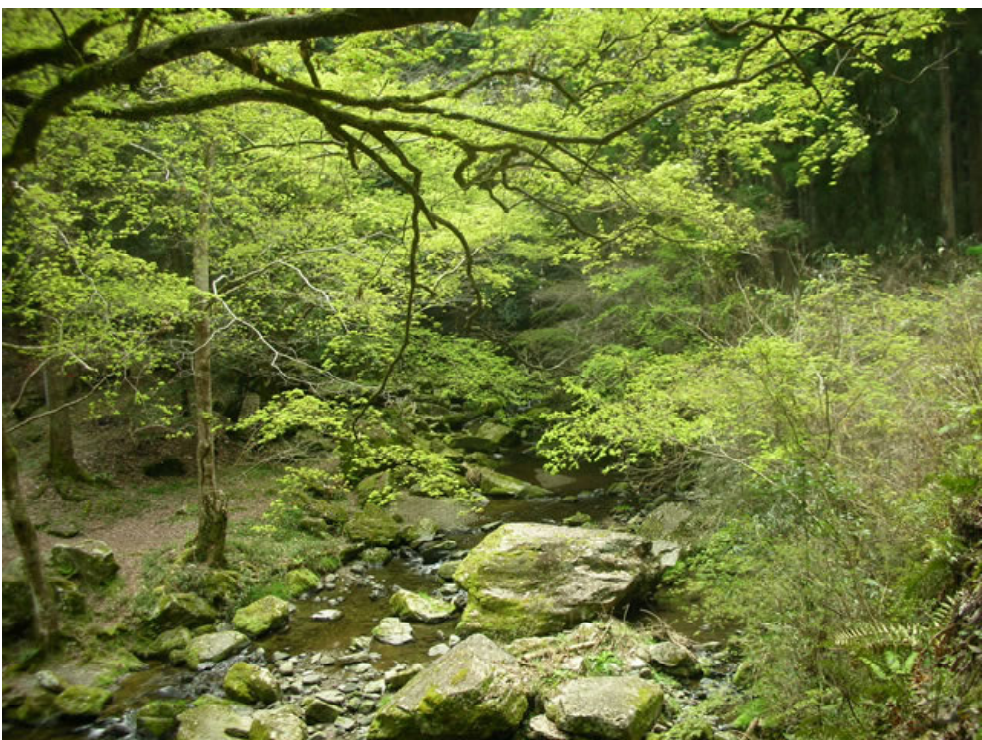
それに、桜の季節に吉野を訪れるにしても、通勤ラッシュ級の混雑に巻き込まれてしまうと、やはり気持ちも減入る。それをおしてでも見る価値があるのが吉野の桜だとしても、できることなら、気持ちよく楽しみたい。

上千本へのぼり、奥千本をまわる行程である。ハイキングコースである以上、車を降りたあと、いくばくかの時間は歩かねばならないのはもちろんのことなのだが、自分の足で歩くことを厭う人々には味わえない、水と桜の景勝が、そこにはある。江戸時代には、本居宣長も歩いたという山道は、観光エリアにはない静けさに満ちている。



吉野水分神社の本殿は三棟連結型

水面に緑の木々に映える象の小川



高原を埋める紅の絨毯

## 大和葛城山

約 6 時間

奈良と大阪の府県境をなす金剛葛城山系。その主役の一つ、大和葛城山の五月は「二百萬本」のキャッチフレーズでも知られるツツジの季節である。山頂を赤く染める花の絨毯を求めての高原ハイキングに出かけてみよう。

葛城山という名前の山は、あちらこちらにある。有名どころでは、大和葛城山のほかに、岸和田の和泉葛城山があり、他に中葛城山（金剛山の南方）や南葛城山（岩湧山の南西）がある。金剛山にも葛木岳という異名がある。

て、さらに関西を離れて加えると、静岡県にも伊豆三島の葛城山があるから、あちらこちらにと言っても、言い過ぎには当たらないだろう。

この「葛城山」という名前、ご本家である大和葛城山の山名由来は、「神武天皇がカツラの網を使って祀ろわぬ民を服従させた」という話が語源になっている。ただ、根っこがこの話だったとしても、「葛城」の名前が各地に転用されるのは、次のステップである。それは、大和葛城山で修験道を開いたとされる役小角（役行者）の事績である。

役小角については、厳密な意味での事績は確認しようもないが、伝説を追いかけると、全国各地に足跡を刻んで

いることがわかる。山伏に関連する言い伝えがあれば、ことごとく役行者が登場して、「古くは役行者が云々」となる。そして最後には「この山を葛城山と呼ぶ」と、まとめるのである。

こういった類の話の一つひとつについて、真偽のほどを検証するのは、実りのある作業とは言えない。だが「謂われが存在する事実」を重んじるのであれば、役行者は全国各地をくまなく飛びまわったスーパーマンなのだ。

そして、縦横無尽に駆けめぐる行動力においては、日本史上、彼に比肩する存在といえ、各地に井戸のため池を作ってまわった弘法大師こと空海か、あちらこちらの地方にまことしやかな目撃談が残されている八百比丘尼、あるいは抜群の機動力を生かして全国の小学生を震え上がらせた口裂女といったところだろう。

いろいろな伝説（現代であればうわさ話）が、一つの名前の上に集まってきて、それに基づいて、さらなる人物像が作られていく。そうした伝説生成のパター

ンがここに見られるのである。

ロープウェイも開かれ、現代では関西屈指の人気を誇るハイキングスポット、大和葛城山。その明るい雰囲気とは裏腹に、「葛城」の名前を追いかけてみると、文化のドロドロとした澱みも見える。



五月の中旬には山頂の自然ツツジ園が見ごろを迎える

伝説の森と社

## 鞍馬と貴船

約 3 時間



絡みつくように足下を這う木の根たちは、伝説の舞台を演出しているようだ。

幾多の伝説に彩られた鞍馬と貴船。両地を結ぶ「木の根道」は、木の根が奇怪な姿態で地表を覆い、物語の舞台に相応しい雰囲気醸し出す。京都の北奥にある鞍馬寺と貴船神社を訪れると、伝説の空気に触れるとともに、新緑の洛北が満喫できる。

NHKのドラマ化で、再び知名度を高めた鞍馬天狗。大佛次郎や嵐寛寿郎の時代とは比べられないが、懐かしのヒーローが平成の世に復権を果たした感がある。

だが、そもそもその「鞍馬天狗」とは、鞍馬の山にいた天狗のこと。義経伝説でも重要な役割を果たし、愛宕山の太郎坊らとともに、よく知られた存在だった。

鞍馬の山道は、天狗の生息地に相応しい雰囲気を残している。細かいことを言えば、ハイキングコースになっている現代では、「暗部の山」の字をあてて古人が思い描いた鞍馬とは重ならない。しかし、それでも、木暗さの漂う木の根道の雰囲気には、魔性の棲処に通じるものがある。

また、貴船も伝説に濃く染められた土地である。恋の失意に暮れる和泉式部が詠んだ歌、

もの思へば 沢の螢も 我が身より  
あくがれ出づる 魂かとぞ見る

に山の神と感応したと語られるほか、丑の刻詣りの呪詛が行われていたとも伝えられている。



中宮にある和泉式部、螢の歌碑

六甲ハイクのメインストリート

## 六甲魚屋道

ととやみち  
約 7 時間

街の背後に聳えることで、古くから「神戸の背山」と呼ばれてきた六甲山系。遊歩道もたくさん設けられており、関西随一の人気を誇るハイキングエリアである。

その六甲の中でも、とりわけ人気が高いのが、高座の滝から風吹岩、そして最高峰山頂を経て有馬温泉へおりの縦走コースだ。



現在では絶好の休憩スポット本庄橋跡

ハイキングスポット六甲山の歴史は、明治時代に神戸の居留外国人たちが競って別荘を開いたことから始まる。しかし、山中を通る道、いわゆる六甲越えの道はそれ以前から開かれていた。風

関西圏におけるハイキングのメッカ・六甲山。近代登山の発祥の地でもある六甲山の中でも、メモリアルスポットとなっているのが高座の滝だ。ここからロックガーデンを経て山頂に到るコース、六甲のメインストリートをたどる。

吹岩を経て有馬に至る道も、江戸時代に開かれた交易路で、おもに瀬戸内の塩や魚介類を運んだことから「魚屋道」といった。現在でも橋の一部が残され、コース上の目印になっている本庄橋跡という場所があるのだが、この本庄橋が描かれた古地図もあり、往時はたくさんの人が行き来していたことが知られる。

また六甲のもう一つの顔である「近代登山発祥の地」というのも、このコース上にあるロックガーデンに象徴される。足にゲートル、肩に縶りザイルという出で立ちで、先人たちが新しい岩場を探して闊歩していたエリアでもある。

六甲に入る目的も異なれば、目にする景色も違ふとなると、現代のハイカーたちが、江戸時代の行商人や大正期の先覚者の思いを体験するのは難しい。しかし、名山リストを踏破する感覚で歩くのではなく、道に刻まれた、たくさんの方の足跡があることを知って歩いてみると、風吹岩でくつろいでいるときや、有馬へおりの道中の景色の見え方にも、また変化が起きてくるかも知れない。



高座の滝からの道と、魚屋道が合流するところにある風吹岩は表六甲のシンボル

京都のプチお遍路

## 御室八十八箇所

約 4 時間



山道の傍らにお堂が建ち並ぶ

四国のお遍路が広く行われるようになったのは江戸時代のことらしい。それ以前にも巡礼の思想はあったし、お遍路を構成する寺院の歴史も短いものではない。だが、「お遍路」という言葉が定着して、一般の民衆が八十八の寺院をめぐるようになったのは、江戸時代になってからのこ

ととやみち

その背景には、幕府の統治が行きわたるなかで、街道の整備や、宿場の成立など、旅をめぐる環境の改善が挙げられる。しかし、それでも、実際に四国にわたり、何日間も見知らぬ土地をめぐる歩くのは、蒼氓にとっては命がけの行為であり、彼の地で行き倒れになった者も少なくなかった。

そうした状況のなかで、行きたくても

四国八十八所参拝を模した小さな巡礼道は日本各地に作られている。京都にも、御室仁和寺の裏に八十八所があり、四国のお遍路巡礼と同じご利益が得られるとされてきた。スケールは小さくても、味わいの深いこの御室八十八所を歩いてみる。

行けない人々の願いにこたえるべく、満願を果たした先達を持ち帰った札所の砂を埋めて、八十八箇所をまねた巡礼道が各地に開かれた。模擬お遍路というか、プチお遍路の出現である。

御室八十八箇所は、江戸時代後半、文政年間に開かれたという。仁和寺の裏にある成就山に、お遍路八十八箇所の砂を埋めて、その上に八十八のお堂を建て、それぞれに八十八箇所と同じ名前をつけたのである。金銭的な理由、あるいは肉体的な理由、そのほか様々な理由から、お遍路に向かえない人々のために開かれた道は、多くの信者で賑わったと伝えられている。

今やお遍路は観光ツアーでも行われている。そのぶん、プチお遍路は忘れられがちだが、その背景を思うと、情念の道としての重みを感じずにはいられない。



「此東南胎藏界」と「此南金剛界」。密教の世界観を現実の土地に重ね合わせている。

西国三十三箇所 難路

# 醍醐山

約 5 時間

醍醐山は「果て」の山である。地球がま  
ん丸くなった今日では、物理的な移動で  
いえば、「果て」の場所などは消滅してい  
る。しかし、世の中が、まだ平面だった時  
代には、脳裏の最果てで、壁の如くそそ  
り立っていた山々は、まさしく世の果てだ  
ったはずだ。

京都の東方に連なる峰々を東山三十  
六峰と呼ぶのは江戸時代に入ってから  
のことだ。この三十六峰については、  
三十六の山々を個別に意識していたので  
はなく、京都の東端とのニュアンスで語ら  
れていたところもある。しかし、言葉の響  
きを重んじて三十六峰を端のように言っ  
ていても、人々はその奥に、もう一つの壁  
が聳えていることも知っていた。それが醍  
醐の山々である。

もちろん、東海道をはじめ、主要街道  
の整備は古くから行われており、空間的  
に醍醐より遠くへ行くことはできた。し  
かし、それでも醍醐の山越えを行くとな  
ると、どうだったろう。

お遍路とともに、巡礼路として名高いのが西国三十三箇所。太  
閤大花見でも知られる醍醐山には、十一番札所の上醍醐准胝堂  
がある。山麓の醍醐寺境内から、三十三箇所中でも難路に数え  
られた上醍醐への道をたどってみよう。

西国三十三箇所の巡礼路で、十一番  
上醍醐から十二番岩間寺への道は、もっ  
とも険しい箇所とされていた。札所めぐ  
りにおいては、岩間寺からさらに十三番  
石山寺へと道は伸びるのだが、石山詣で  
は古くは逢坂越えのほうが一般的だっ  
た。醍醐の山々が、道を遮る壁のように  
考えられていたのだろう。

現代的な感覚でいえば、距離からいって  
も、道の整備状況からいっても、それほど  
の険しい印象を与えることはない。また  
一つの山頂がそそり立っているわけでない  
ぶん、平易な部類に入れていいのかも知  
れない。それだけに、古人が抱いたイメー  
ジとのギャップが面白くも思えてくる。

この醍醐山ハイキングだが、上醍醐から  
高塚山を経て下りてくるコース以外に  
も、音羽山方面に抜けるコースや、「いに  
しえの難路」岩間越えのコースなどがあ  
る。さまざまな歴史的背景を重ね合わ  
せることで、それぞれに異なった楽しみ方  
も膨らんでくることだろう。



市街地から眺める醍醐の山々。この山並みを越えて、近江の国から東国へと向かった。

「水の山」六甲へ

# 六甲住吉道

約 6 時間



五助ダムを越えると、高山湿地帯のような景観が広がる。だが、これも五助ダムによってできたものである。

芦屋ロックガーデンを筆頭に、ゴツゴツした岩山のイメージが  
強い六甲山だが、その懐に入ると、そこは同時に「水の山」で  
もあることがわかる。中でも五助の澱みを擁する住吉道は、水  
の六甲を楽しむには最適の潤いコースだ。

居留外国人たちによる Play-Ground ROKKO の開拓より早  
く、六甲を越える交易路は開かれていた。住吉川をさかの  
ぼる住吉道もその一つ。この住吉道は、六甲山を舞台とす  
る長い交通史を窺わせるだけでなく、六甲山のもう一つの  
姿、「水の山」六甲の印象を強く漂わせている。

住吉川は、昭和十三年に発生した阪神大水害で甚大な  
被害をだした河川である。大水害の被害を受けて流域に  
は堰堤や砂防ダムが多く築かれた。その姿もまた六甲を  
語る上では忘れられない一面なのである。

住吉川の五助ダムは、六甲では最大級の砂防ダム。夏場  
には涼しげな景観が楽しめる  
のだが、大水害の教訓から造  
られたものであることも知っ  
ておきたい。

またハイキングコース上では  
手ごろな休憩ポイントにもなっ  
ている五助ダム上部の澱みだ  
が、五助ダムがあるからでき  
た澱みである以上、ここにも  
また大水害の記憶は刻まれて  
いる。



大水害は谷崎潤一郎の「細雪」にも描かれた。甲南小学校横の文学碑

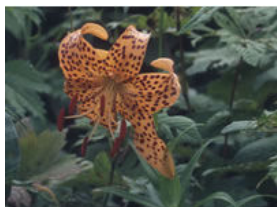
鎮座する湖東の雄

## 伊吹山

約 8 時間

琵琶湖の東、湖東エリアに雄大な姿を見せる伊吹山。その山頂一帯は「天上のお花畑」とも呼ばれ、西日本で高山植物が観察できる数少ないスポット。とりわけ夏から秋にかけてのシーズンには、多くの草花が競い合うように開花する。

(上) ヤマゼリ  
(中) コオニユリ  
(下) キリンソウ



伊吹山は関西では数少ない一〇〇〇超の山である。しかも独立峰での一〇〇〇超となると、伊吹を置いて他にはない。それだけに、注目の度合いも高い山となっている。登山案内書の古典『日本百名山』では、関西の山はほとんど採用漏れとなっているが、伊吹は例外だったようだ。いくぶん斜視的な記述もあるとはいえ、伊吹は深田御大の眼鏡にも叶う力を備えた山であった。

もつとも、伊吹のセールスポイントは、百名山の時代とはかなり変わっている。伝説の山、薬草の山、スキーヤーの山……といったところは、現在では二の次である。今では花の山、すなわち高山植物の宝庫たる側面が注目を集めている。物の見方、考へ方は時代とも推移するのは当たり前だが、案内書の世界にも同様のことが窺えて興味深い。



独特の地勢は山頂付近に、他では見られない「お花畑」を形成する。

仏教の聖地 天涯の要塞

## 比叡山

約 7 時間

平安時代、伝教大師最澄によって天台宗が開かれ、延暦寺が創建された。鬼門の方角から帝都を見おろすことで、比叡山は京都のみならず、国家にとっても重要な意味を持つ山となった。『源氏物語』にも「山の僧都」と呼ばれる人物が登場するように、「山」という普通名詞が、比叡山を意味する固有名詞として通用するようになったのも、視覚的な大きさによるものだけではなかったのである。

また比叡山をめぐっては、「北嶺」という言葉も用いられた。これは「南都」との対で使われるケースがほとんどで、奈良は興福寺との勢力争いを語る文脈になる。武蔵坊弁慶の姿でイメージされる荒くれ坊主の印象も強く、比叡山には宗教的な空気と同時に武闘派的な雰囲気も漂っていたのである。

そうした山の荒法師たち僧兵が歴史の前面に跳梁するのはたびたびのことではある。中でも大きく語られる事件としては、比叡山そのものが戦場となった南

山上に巨大伽藍延暦寺が構える比叡山は、日本仏教の聖地であるとともに、史上有数の戦略拠点だった。京都側の雲母坂を登ると山岳要塞だったいにしへの姿も偲ばれ、山頂広場から京の街を臨めば、延暦寺の歴史的な意味合いが実感できる。

北朝動乱のおり、足利尊氏の離反によって都を追われるかたちとなった後醍醐天皇が身を寄せた際のこと、あるいは織田政権下において足利義昭を支持したことから全山が包囲され焼き討ちを受けたことなどがある。

このように、何度も政治権力との衝突を繰り返してきたのだが、そもそも比叡山が武装化できたのはなぜだろう。一つには宗教的権威をかざすことで世俗の権柄を無視することができたからだろう。しかし、それだけではなく、比叡山そのものが地形的に天然の要塞として屹立していたことも大きな要因だったと思われる。京都側から見上げる山容からは、そのことは推測できる。登山道の雲母坂を歩いてみると、急峻な坂道を登り続けねばならず、往時の姿を体感することにもなる。

ちなみに、現在では整備されたハイキングコースとなっている雲母坂には、後醍醐天皇を匿った際に「朝

敵」を向こうにまわして戦ったことの栄誉が称えられたのだろう、ゆかりの顕彰碑がいくつか残されている。



洛北・松ヶ崎から眺める比叡山。現代でも大きな存在感がある。

森と水のウォーキング

## トウエンティクロス

約 5 時間



生田川上流域では、静かな森林の中を道が続いている。

「トウエンティクロス=Twenty-Crossing」とは、六甲山から流れ出る生田川上流の異名。六甲山を郊外の別荘地に開拓した居留外国人の間で使われていた名前。渡渉を繰り返す「二十渉」の意がある。このトウエンティクロスから摩耶山を目指す。

ルームやその周辺の人々にロマン主義的な趣味があったのかどうかは、よくわからない。それでも生田川上流の道に名前を残すシエルあたりには、その雰囲気を感じられる。もちろん、シエルの足跡も詳しく確認できるわけではないので、厳密な意味での正しい評価とはいえないのだが、Twenty-Crossing からシエル道、そして穂高湖へと歩くと、ロマン主義時代の詩人ワーズワースの世界へのまなざしも感じられる。

六甲の地名は面白い。あるいは奥が深いといってもいいだろう。カタカナ言葉が用いられている点だけをいうのでは、山の



山頂のため池は、上高地に通じる雰囲気があったことから、穂高湖と名付けられた。

北山杉の里に秘瀑を訪ねる

## 菩提の滝

約 5 時間

川端康成の『古都』は、京都の美しい一年を描いた作品として、映画をはじめ、これまでも何度も映像化されてきた。しかし、春の平安神宮にせよ、祇園祭の夜にせよ、あるいは優雅な京ことばにせよ、描かれた風物が美しすぎるがゆえに、小



丸太をみがいている家があった。水にひたした丸太をあげて、菩提の砂で、女たちがいていねいにみがいている。棒色の粘土のように見える砂で、菩提の滝の下から取ってくるのだそうである。(『古都』より)

説の世界を期待して京都を訪れた者を失望させることもある。舞台となったのが昭和三〇年代の京都であることを差し引いたとしても、やはり作り物っぽさは否めない。しかし、川端の描く世界には、『雪国』にしても『伊豆の踊子』にしても、失われた日本の美に対する郷愁が色濃く漂っている。『古都』が観光都市の四季と年中行事を描いているだけに、観光客的な目線からの期待も持ってしまうのだが、描かれているのは川端の時代においてでさえ、すでに失われた美しさだったのかも知れない。

菩提の滝それ自体は、小説のなかで大きく取り上げられてはいるわけでもないが、北山杉を語るうえで重要な場所である。磨き丸太とも呼ばれる北山杉、製品に仕上げられた時の艶やかさは、この滝壺で採取した肌理の細かい砂を研磨剤に使うことによって得られていたというのである。これも、現代では行われていない遠い過去の風習なのだが、菩提の滝と北山杉の美しさは、象徴的なところで切り離すことはできない。

また『古都』のヒロイン、千重子が北山杉の里に対して抱いた、抑えきれない懐かしさ、その感慨を現代の北山町の風景から感じ取ることは難しい。北山町の街並みも現代的なものに装いを改めているからである。だが『古都』に描かれた世界は、それが言葉の上に留まるものであり、虚構の美しさであることを知っておけば、現実との乖離もそれほど苦にはならない。たとえすぐ近くを舗装されたアスファルトの道が通っていたとしても、菩提の滝などは、失われた美しさを幻視するようすがなってくれる。

古代史の謎 情念の山

## 二上山

約 5 時間

大和の古刹、当麻寺の背後にそびえる双耳峰が二上山。大阪と奈良の府県境をなすダイヤモンドトレールの北端でもあるこの山は、古代史に名高い悲劇のプリンス大津皇子ゆかりの地で、歴史ファンにとっては思い入れの強い山である。



当麻寺より眺める二上山のタワ

「神話的想像力」という言葉がある。夜の暗闇を失った現代人には難しくもなつた感覚なのだが、それでも二上山のことを書くとなると、どうしてもこの感覚に触れなければならない。

事の発端は飛鳥時代、大津皇子の憤死に始まる。天武天皇の皇子として生を受け、長じるに従い世評も高まっていたにもかかわらず、父帝が崩御するや謀反の嫌疑が掛けられて刑死するのである。事件の背景には、大津皇子にとつての叔母であり継母、持統天皇の意向があったともされるのだが、真相は不明である。

大津皇子の遺体は二上山に埋葬されたことになる。『万葉集』には伊勢斎宮だった姉・大御皇女の作として

うつそみの人なる吾れや 明日よりは  
二上山 弟と吾が見む

という有名な挽歌が載せられている。二上山を弟として見るというのは擬人

法であり、愛する弟を奪われた悲しみの表現であると解しても、十分に通じるところだが、それだけなのだろうか。そこには現代人が失った想像力があるようにも思われる。

山や巨岩に神の姿を見いだすのは、神話の世界では珍しくない。飛鳥の代は、神話時代ではないし、大津皇子は神になったわけでもない。しかし大御皇女の視線には、神の姿を見る眼差し、その残滓が感じられるのである。斎宮として神に奉仕していたがゆえに持ちえた神話的な眼差しだったのでないだろうか。

時代は大きく下り、大正時代になる。奈良を旅行した和辻哲郎は、二上山を「この黒く茂った険しい山ばかりは、何かしら特別の生気を帯びて、なにか秘密を蔵しているように見えた」と評した。また戦後になって折口信夫は二上山の情念を小説に昇華させた。『死者の書』である。和辻や折口の場合は、大津皇子事件のほかに、一晚にして当麻曼陀羅を編み上げたという中将

姫伝説の影響もある。前もっての知識があり、純然たる幻視者ではないのかも知れないのだが、彼らが見たものと、大御皇女の目に捉えられたものとは、まったく無縁のものだったのだろうか。

特徴的な双耳峰を眺めても、一枚の風景写真を見る目以上のものを持ってない私たちには確認もできないことなのかも知れない。

## 朝日峰

錦織の季節 三尾の奥山へ

約 5 時間

複数のものごとに数を付けて総称したものを名数といい、その習慣は国内でも古くから行われてきた。景物でいえば、日本三景や富士五湖などがよく知られており、京都に限っても五山送り火や東山三十六峰といった例がある。三尾というのにも有名な名数で、慣用的には「三尾の紅葉」というふうに使われ、紅葉の名所として紹介されることが多い。

ところでこの三尾なる名数は、高尾・檜尾・梅尾の指しているわけだが、檜尾と梅尾はさておき、なぜ高尾なのだろう。「雄」の字の下に、申し訳なさうに（尾）と書かれている表記も見られるのだが、名数にすることを優先して名前のほうを強引に書き変えているような雰囲気さえある。

そこまでして名数にこだわる必要があるのかと訝しく思っていたところ、面

白い説が目に付いた。江戸時代の案内記「雍州府志」に書かれていたもので、高尾山 山の形、鷹の尾に似たり。故に或いは鷹尾山と称す

という説である。これにのっとれば、三尾という名数は「鷹尾・檜尾・梅尾」から生まれたことになり、綺麗に「尾」が並ぶ。

三尾という名数がいつ頃から使われるようになったのかは、よくわからない。いつしか、「鷹尾」の表記が、一般的な「高尾」に吸収され、鷹尾の方は忘れられてしまった。その結果、「高尾（尾）・檜尾・梅尾」といった苦し紛れの書き方もなされるようになったのだろう。

なお、今回の主役である朝日峰だが、この山も実は名数を作っている。先に挙げた「雍州府志」に見られるもので、愛宕山の頂



「山の端にわれも入りなむ月も入れ 夜な夜なごとにまた友とせむ」  
三尾の一つ、高山寺の境内には、川端康成がノーベル賞授賞式の講演で紹介した、明恵上人の歌碑がある。

峯、高尾山、龍上山、賀魔蔵山有り  
とある。現代では馴染みも薄くなっているのだが、「愛宕五嶽」とでも呼ぶことになるのだろうか、その一角を朝日峰は担っている。

西播磨の麗峰

# 明神山

約 6 時間

西播磨の明神山は、関西でも指折りの美しい山。岩屋池の映る「逆さ明神」の山容には、「日本のマッターホルン」との賛辞も寄せられている。一年の中でも、鮮やかな紅や黄色に木々が色づいてくると、明神山も見ごろを迎える。



明神山の山麓は「夢の郷 農業公園」に整備されていて、キャンプ場やロッジもある。



山頂に立つと瀬戸内海まで見晴らせる

山を語るうえで、標高は大きな指標になる。深田久弥の『日本百名山』でも、名山なるものの目安に標高が入っている。だが標高が低くても、強い印象を残してくれる山もある。夢前の明神山は、その一つだ。  
 なによりも山の姿が美しい。同じ夢前にある雪彦山のような岬々たる山容ではないが、周囲の山並みとの相対的なバランスが秀麗なのである。この明神山を前にすると、山の楽しみ方の一つに、「見る山道楽」というジャンルがあってもいいようにも思えてくる。小径を踏みしめて楽しむ山、山頂からの眺めを味わう山などと並べて、麓からの眺めに醍醐味のある山が存在するのである。  
 標高がすべての原因なのかどうか、明神山は、深田百名山はもとより、アウトドア雑誌の「新ハイキング」が選んだ近畿百名山からもこぼれている。しかし、そうした選定などどこ吹く風、素直に好きなものは好きだと言える山である。

火鎮の神 月詣りの山

# 愛宕山

約 6 時間

東の比叡山に対して、西の愛宕山。これらは、都の東西に聳える二つの山というイメージがある。標高の上で抜きん出た二つというだけでなく、視覚的にもよく目立っている二つである。さらには、比叡山が天台宗の総本山であるのに対して、愛宕山は月詣りや千日詣、火除の護符など民間習俗の山であり、心の世界でもやはり対峙している。

それでは、愛宕山と比叡山を比べて決定的な違いはと考えると、どうだろう。比叡山にはドライブウェイやロープウェイなどの交通機関が充実していて、老若男女、誰でも登ることができのに対して、愛宕山はそれが無いということだろうか。山頂に至るには、自分の足を信じるより方法はないのである。  
 ところが過去の話をもちだすと、愛宕山にも立派な交通機関が通じていた時代があった。軍部より鉄の供出が求められて撤去されたのだが、古い観光パンプレットをみると、東洋一をうたうケ

千日詣りが行われることでも知られる愛宕山。俚諺に「愛宕さんへは月まあり」と言われるほど、京都の人には馴染みの山でもある。また清滝川は紅葉の名勝としても知られ、晩秋には山肌が真っ赤に染まる美景と出合うことができる。



紅葉の季節、清滝からの表参道は多くのハイカーが往来する

ーブルが紹介されている。そのほか、山頂のホテルや遊園地もあったらしい。愛宕山は、ハイキングの山という現在の雰囲気からは想像もできない規模の大きなリゾート地だったのである。  
 そうした施設は、凶暴な時代のうねりの中でことごとく姿を消してしまっただが、愛宕山にとっては、どちらがよかったのだろうと思うこともある。昨今の世界遺産論争でもたびたび耳にする問題が愛宕山において一つのケーススタディのように実践されたことになる。  
 すなわち、有名になって簡便に訪れることができ、季節を問わず多くの観光客で賑わうこと（ひいては地域に経済効果をもたらすこと）をよしとするか、知名度も低く、来訪者がまれであっても、その場所本来の姿が保たれていることをよしとするか、その二つのせめぎ合いである。

愛宕山では、時代が落ち着きを取り戻した後にも、ケーブルの再敷設は行

われなかった。もちろん、抜群の知名度があるハイキングスポットなのには変わらないから、静寂の山と呼ぶには、ほど遠い。しかし騒々しい観光地となっていくわけではない。どちらがいいのか、結論は訪れる人それぞれの趣味ないし主義主張に帰するとはいえ、一つの山において、相対する二つの局面が現実的な形で対照されたケースでもある。

近代アルピニズム胎動の地

## 荒地山と ロックガーデン

約 6 時間

大正時代の末期から昭和時代の初期にかけてスポーツアルピニズムが紹介され、当時の若者たちの心を揺さぶった時代からみれば、いわゆる「山を楽しむ」人たちの様相も目線も別種のものとなっている。この状況を「登山の裾野が広がった」という向きもある。肯定的なニュアンスでそう言われる場合もあれば、否定的な響きがこめられているケースもある。

「雪と岩」―それはアルピニストの魂を魅する最高至純の誘惑であり、スキーとザイルとピッケルを操ることがスポーツとしての登山の神髄である。

(藤木九三「岩・雪・アルプス」)

こう高らかに宣言するスポーツアルピニズムを頂点とする価値体系が、もしもあるとするのなら、山野を散策するハイカーたちの活動は「裾野」だろう。しかし、山をフィールドとする遊びの中

近代登山発祥の地・六甲山の中でも象徴的に語られるのは、藤木九三らが岩のぼり技術を磨いた芦屋ロックガーデンだろう。高座の滝をスタートして、ロックガーデンの中の岩場を見てまわり、荒地山から風吹岩へと歩く。

で、そのスタイルの違いに序列を持ち込むのはどうかという疑問も残る。もちろん、手軽なハイキングコースだとしても、いい加減な準備と安易な気持ちで入ることを推奨するつもりはない。それでも、スポーツアルピニズムとハイキングに同じ基準をあてはめて序列化することはできないだろう。

ただ、スポーツアルピニストの信奉者がハイカーたちを見下すことはおかしいと同様に、ハイカーたちが開き直った

態度でアルピニストたちの足跡への敬意を失うことも許されないとと思う。六甲はアルピニスト、ハイカー、さらには観光客も同居できるフィールドである。接するところがハイキングスポットとしての六甲であっても、ここで鍛錬を重ねながら、その彼方に輝く銀嶺や未知の大岩壁を夢見た先人たちがいたことや、彼らの情熱も忘れたくない。

芦屋ロックガーデンには、ハイキングコースとして整備されている中央陵コースだけでなく、キャッスルウォールのある高座の滝エリアや、A懸など記念碑的な岩場の残る地獄谷エリアも含まれる。中央陵コースを歩くだけでなく、その他のゲレンデの数々を見てまわってくるだけでも、往年の空気が伝わってくるに違いない。



今日のクライマーたちにもトレーニングの場を提供しているキャッスルウォール

都の顔 大の字探訪

## 大文字山

約 3 時間

イメージイラストで京都の街を描く場合、グリッド状の道路を描いて、鴨川を描いて、そして東寺の五重塔と大文字山を入れておけば、おおよその雰囲



金尾は京の街を眺めるベストスポット

気は表現できそう。それほど、大文字山は京都の街にとってシンボリックな存在なのである。

ただシンボリックであれば、そのぶん、表面的なところだけが切り取られて、その中身の詳しくはどこかに置き忘れるられることも少なくない。大文字山と通称されているが、これは如意ヶ岳という山の前山であるということや、大文字へ登るには、銀閣寺の裏手からだけでなく、鹿ヶ谷からの道や南禅寺からの道、あるいは山科方面からの道などがあるということ、大文字山に関するこれらの情報は、名前の知名度とは裏腹に、意外と冷淡な扱いを受けがちである。

また山中にある地名の一つ、七福思案処というのも、面白い小ネタの一つ。山科方面からの道や南禅寺方面からの道など、いくつもの道が合流するこの場所では、これからどちらへ行こうかと思案したところから付けられたような感じもあり、うまくできた命名である。あるいは銀閣寺方面から金尾に登る道中にある中尾城の史跡や千人塚など

京都は夏の風物詩、お盆の送り火で知られる大文字山。金尾（大の字の中心点）や山頂を訪れるだけなら、ポリウムも小さくなるが、山科の毘沙門堂門跡や銀閣寺といった山麓の寺院拝観を組み込むと、面白みも倍増する。



雪の降った翌日が晴になると、大の字が白く浮き上がる。鴨川河川敷から眺める白い大文字は、年に数度とはお目にかかれない。ちなみに、大の字が描かれている山の、その奥に見えるのが如意ヶ岳。

も、紹介されることは少ない。大文字山には、かつて山城が築かれており、戦国時代には合戦の舞台ともなったということを知ると、大文字山に対する見方も変わってくる。

京都の街にとっては身近でありつつも、掘りさげると、さまざまな情報が出てくる山でもある。

グライダー飛翔の丘

# 高御位山

約 4 時間

標高は三〇〇m程度の小山である。だが、この山を舞台にして行われた、関西でのグライダー初飛行という「事件」は、大きなインパクトを残した。主人公は、渡辺信二。加古川市志方の出身、二十一歳の青年である。時は

高御位山は加古川市と高砂市の境にある山。眺望は抜群で、西播磨一帯から瀬戸内海までを広く眼下に納めることができる。またこの山は関西初のグライダー飛行が行われた山で、山頂にはその壮挙を記念する「飛翔の碑」が建てられている。

大空に飛び立つイメージを表現した飛翔の碑



そしてさらに発達をとげた航空機によって一変した戦後の世界観、時代がその後にもみせた展開を思うと、彼の情熱はまさに時代を先取りするものだったといえる。「先覚があった。彼を渡辺信二といった」ではじまる碑文がはめ込まれた飛翔の碑は、昭和の中頃になって建造されたものではあるが、渡辺信二という人物のこと、その大いなる挑戦のことを現代に伝えている。



山頂の岩壁には天孫降臨の地との伝承もある

グライダーを作り上げた。そうして自らが乗りこんで実際に飛ばしてみせたのである。高御位山の頂上から、彼を乗せた状態で機体を放り出し、落下中に滑空体勢へ移るといいう荒技だったらしいが、三〇〇mの滑空を成功させた。空軍力が戦局を大きく左右した第二次世界大戦、

寂光院と大原の里山

# 金比羅山

約 5 時間



大原に雪が降ると。京都の街なかととは雰囲気は一変する。

京都歌謡の定番、「女ひとり」の歌い出しで登場するように、現代の大原は、三千院と寂光院を中心に、人気の観光スポットとなっている。春秋のシーズンには行楽客で溢れかえるし、比較的

平家物語の終幕を飾る名刹、寂光院の裏手にあるのが金比羅山。大原三山（金比羅山、翠黛山、焼杉山）の一角で、山中には眺望スポットも多い。観光客の出足が減る季節に、金比羅山から寂光院をめぐると、大原の静かな素顔と出合える。

静かになる冬場でも、閑散という状態には至らない。しかし、大原を語る上では欠かせない『平家物語』灌頂巻を引き合いに出すのなら、建礼門院は、そもそも世間の目に晒されることを厭って大原に入ったことになっている。

岩根踏み誰かは訪はむ 檜の葉のそよぐは鹿のわたるなりけり

お側仕への女房が詠んだ一首、庵の外を歩く音の主は、山の鹿だったという詠は女院の心を映していた。また女院のもとを後白河法皇が訪れる「大原御幸」のくだりでは、

麓破れては霧不断の香を焚き、 柩落ちては月常住の灯火をかかぐ

と古い漢詩を引いて寂光院の静けさを描く。女院の姿は、人の訪れない陋屋で清楚に暮らすといった、ある種の理想像でもあった。

現代の大原に灌頂巻が重なることを望むのは、無い物ねだりである。だが、それでも冬場に寂光院の裏山、金比羅

山を歩くと、人気観光地らしからぬ静けさも残っている。もちろん、それとて灌頂巻の静寂ではないが、せめてもの慰めにはなるだろう。なお灌頂巻には、「翠黛」という言葉が使われている。

古りにける岩の絶え間より、落ち来る水の音さへ、ゆゑびよしあるところなり。 緑蘿の垣、翠黛の山、絵に描くとも筆も及びがたし

苔むした垣根と、なだらかな山々、実景ではなく、言葉のイメージで描く山里の風景だ。この「翠黛」から、翠黛山の名前が取られたのだろうか。



寂光院へ導く道標

稲荷信仰の深奥部

# 伏見のお山めぐり

約 3 時間

伏見のお山めぐりは、その歴史が詳細に記されていないところもある。伏見稲荷のご神体、伏見山を「お山」と呼ぶのは古くからのことで、その昔、本殿が山頂にあったことにちなみ、江戸時代には正月五日には山上への参拝も行われていたという。

この風習が、現在のお山めぐりになっているとも考えられるが、同じ道を戻ってくるのではなく、山中を巡拝する形に確定したのがいつの頃なのかは不明なのである。

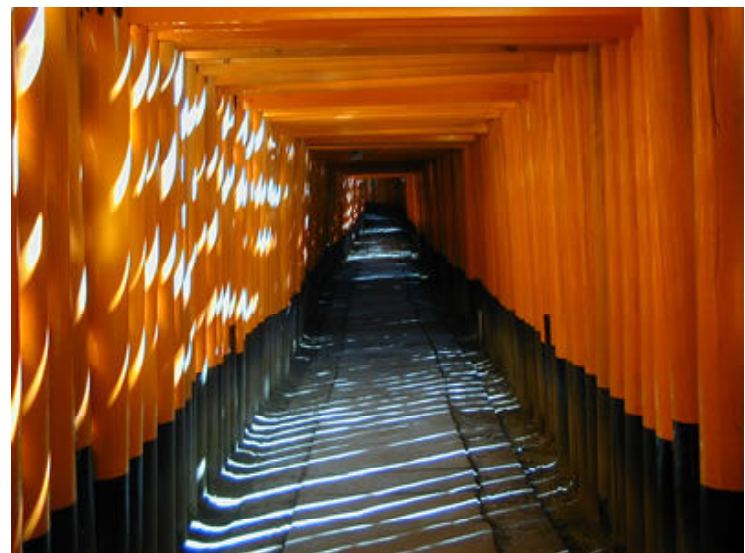
道中にある小さな社の数々(お塚)は、そのほとんどが明治以降に置かれたものであり、少なくとも明治時代にはお山めぐりが行われていたのだろうが、それがどこまでさかのぼれるのかわからない。やはり不明とするしかない。

刀匠、小鍛治宗近。この名前も、伏見稲荷のゆかりでよく登場する。祇園

「お山めぐり」とは、伏見稲荷大社のご神体である稲荷山を一周する巡拝路を歩くこと。全国でも屈指の参拝客数になる初詣に比べると、静かなお山めぐりには穴場の感もあり、千本鳥居やお塚信仰など伏見稲荷の本来の姿をかいま見ることもなる。

祭の山鉾巡行で先頭を行く長刀鉾、その真木の長刀を鍛えたときされる刀匠なのが、伏見稲荷の関連で小鍛治宗近が登場するのは能楽「小鍛治」の素材とされる伝説に由来すること。一条天皇の勅命を受けた小鍛治宗近が稲荷の加護を得て、名刀小狐を鍛えたというものである。お山めぐりの道中には、この小狐を打つ際に使われたという石、剣石がある。

ところで伏見稲荷といえば、何を思いでも初詣スポットとしての側面が有名になっている。毎年、参拝者では全国でもベスト5には入り、テレビでしきりに取りあげられるので当然なのだが、稲荷大社の祭事としては二月の初午大祭(はつな)や四月の稲荷祭の方が重視されている。ところが、それらをさしおいて初詣の方ばかりが注目を集めるのは、一般の人々にお山めぐりが顧みられないのと、通



朱色のトンネル、千本鳥居も伏見稲荷のシンボル

白き精霊との邂逅

# 鞍馬と貴船

約 5 時間

森の奥に鎮座する鞍馬寺と貴船神社の魅力は新緑の季節から初夏に現れる。しかし、もう一つ忘れられないのは、一面が雪に被われる冬の鞍馬と貴船だろう。「木の根道」などで白い装いの森と出会うと、荘厳な雰囲気味わうこともできる。

雪の鞍馬。京都の街なかで暮らしていても、近そうであるが、やはり遠く思われる。鞍馬のつづら折参道を「近くて遠きもの」に数えたのは、平安の昔の清少納言だが、叡電が走ってアクセスが便利になった現代でも、雪という条件をつけるのであれば、鞍馬は近くて遠い道に数えていい。

まず、雪の日が少ない。八瀬や市原より北になると、街なかで降雪を待つのは条件が異なるとはいえず、雪の日を狙って訪れようとしていると、そのタイミングはなかなか得られない。

物理的な遠さでは、木の根道はもちろん、普段は歩きやすい舗装路のつづら折参道までもが、しかるべき足回りを要求する雪道に変わる。冬山装備というには大きすぎても、せめて靴程度はしっかりしたもので臨む必要がある。

ともあれ、緑の季節とは別の美しさ、それに鞍馬が本来持ち合わせていたはずの「遠さ」を感じさせてくれるのが、雪の日なのである。



舗装されたつづら折参道も、雪に覆われたダラダラ坂になると、一気に歩きづらくなる



つづら折参道にある由岐神社

生駒の魅力再発見

## 生駒山

約 5 時間

生駒山は、遊園地のある山頂は二の次にして、行程を楽しむ山である。中腹の宝山寺や南側の暗峠、あるいは鳴川溪谷などを眼目にして生駒山を歩いてみよう。芭蕉ゆかりの地であるなどの事績もあり、文学散歩のおもむきも出てくる。

関西の山には、観光地化してしまっているところもある。大和葛城山や摩耶山などが代表格なのだが、そうなった背景としては、山頂に至る至便な交通機関が設置されていることが大きい。生駒



有名な展望台からだけでなく、遊園地の一角からも、眺望は楽しめる。

山もまた、観光地化した山の一つ。ここにも、ご多分にもれず、生駒駅からのケーブルあり、ドライブウエーあり、さらには山頂に遊園地あり、ホテルありと何でもござれのレベルに達している。しかし、交通機関が敷かれ、観光地化するには理由がある。山頂からの眺めがすばらしいとか、多くの参詣者が訪れる神社やお寺があるなどの事情だ。生駒山は、大阪と奈良を同時に見晴らす夜景スポットとしての人気が高く、古くから初詣客で賑わった宝山寺があるので、観光地化の素養は十二分に持ちあわせていたのである。

ただハイカー目線で見ると、何の苦もなくやってくる人がいる場所に、汗と時間を費やして登ることにはためらいを感じてしまう。生駒山に対して僻目を持つてしまうのは、おそらくこのあたりに原因があるのだろう。

そうしたときに見直されるのは、コース取りの妙という発想。たとえば鳴川溪谷から暗峠に至る南面ルートは、歩くよりほかに選択肢はない。修験道場



本堂背後の般若窟を望遠鏡などで観察してみると、意外な発見もある。

としても栄えた千光寺の行場や清滝石仏群などを訪れたあと、暗峠から生駒山へ登ったりすると、史跡探訪であったり、歴史散策であったりと、さまざまに楽しみも生まれてくる。そうなること、生駒山に対する見方も違ったものになるだろう。

メタボ対策と称して、歩くことだけを目的とするハイキングにも意義はあると思う。しかし、あれやこれやの方向に好奇心のアンテナを広げておき、自分なりの楽しみを探して、いわゆる「有名なところ」の山を捉え直すのも面白いのではないだろうか。

早春の霊場探訪

## ポンポン山

約 6 時間

西国三十三箇所、善峯寺からポンポン山へ登る。ポンポン山は、名前のユニークさばかりが目立って注目がちだが、山頂からは抜群の眺めが楽しめるし、山名の話も史的背景などを掘り下げていくと、興味深い側面も見えてくる。

山名が面白い山である。いわく、山頂で足踏みをするとポンポンと響くから……。山頂の説明板には、「加茂勢山」というともある。由来はさておき、この山名が広く用いられるようになったのは、古いことではないようだ。昭和時代の初めに書かれた記録には善峯山や「ポンポン山」を訪れた旨のことが見いだせるし、大正年間にリストアップされた、京都一中の山岳部が選んだ「山城三十山」にはすでに「ポンポン山」の名前が出ている。しかし初出といえそうなデータは確認できない。

一方、資料としての古さをいうのであれば、「口遊くちずきみ」という平安時代の初学書に「神峰山」との言葉があり、この名前はこのあたり一帯の山を指していたものと言われ、修験道との関連も指摘されている。

「神峰山」か「加茂勢山」か、はたまた「ポンポン山」か、これらの名前には、それぞれに違った背景も説明されており、山名からアプローチする面白さ、それを示す好例にもなっている。



山麓には善峯寺の格を示す大きな石標が立つ。



「ポンポン」という音は確認できないが、山頂の見晴らしはすばらしい。写真は北方を眺めたもので正面に見えるのが愛宕山。

関西の山あるき

---

2008年6月30日発行

編著 深呼吸クラブ 企画 OFFICE34

発行者 清水正弘

発行所 深呼吸クラブ

郵便番号 733-0011

住所 広島県広島市西区横川町 2-10-4

電話 082-231-3291

印刷所

---

© 深呼吸クラブ・OFFICE34 2008